

岐阜市内の幼稚園における英語教育の実際

—領域「言葉」との関連を求めて—

A Survey of English Language Teaching by Foreign Teachers
at Private Kindergartens in Gifu City

種村 綾子*・今村 光章**

TANEMURA Ayako and IMAMURA Mitsuyuki

(※桜花学園大学非常勤講師・**岐阜大学教育学部家政教育講座)

The purpose of this study was to report and analyze the practices of English language teaching in early childhood. The survey gave a detailed explanation of the English classes (activities) actually being taught by foreign teachers at 6 private kindergartens in Gifu city, based on the results gained by the classroom observations and the interviews with the foreign teachers. This study also discussed the features of the English classes (activities) and the capabilities of English language teaching at kindergartens.

1. 研究の背景と目的

本研究の目的は、幼児期の英語教育実践の実際について報告し分析を加えることである。まずはこのような研究に着手する背景について述べておこう。

2011年から、小学校での外国語（英語）活動が必修化され、早期の英語教育が改めて注目を浴びるようになった。外国語活動の必修化によって、英語教育の開始年齢が小学校へと引き下げられたことで、幼稚園や保育所などの就学前教育機関における英語教育についての関心が今後急速に高まっていくことが予想される。

もちろん、小学校での英語必修化以前からも、多くの幼稚園が保育内容に英語教育を取り入れている。全国の幼稚園を対象とした英語教育の実施状況に関する適当な調査統計の先行研究や資料がないため一例を挙げるにとどめるが、本研究で対象とする岐阜市内の私立幼稚園でも、岐阜市内の私立幼稚園42園のうち、ホームページで確認できるだけでも30園が既に英語の授業（活動）を行っている。未確認ではあるが、ホームページで、確認ができないとしても、英語遊びを取り入れた幼稚園・保育所は数多い。また、英語教育の時間と謳われていなくても英語に触

れる活動をしている幼稚園は多い。しかしながら、後述するように、その教育内容に調査や分析が入ったことは多くはない。そのため、今回の調査では、私立幼稚園における英語教育について調査したい。（なお、公立幼稚園を対象にしなかったのは、数が限られていることに加え、英語教育をおこなう園も数少なかったためである。また、公立・私立の保育所については、今後の調査対象としたい。）

ところで、小学校で外国語（英語）活動が必修化されることが決まるまでの間に、小学校での英語教育についてはその是非やふさわしい内容など様々な観点から議論が交わされ、そのための研究も多くなされた。

しかし、幼児期の英語教育についてはまだ十分な議論がなされていないように看取できる。また幼児期に適した英語教育の具体的な内容についての研究もその緒についたばかりのように考えられる。それも本研究に着手する理由のひとつである。

以上のような背景を踏まえ、本研究においては、幼児期の英語教育実践について分析したい。具体的には、岐阜市内にある6つの私立幼稚園の英語の授業（活動）を実際に見学し、幼稚園でどのような英語教育が行われているかについ

てつぶさに報告する。

加えて、英語教育を行っている外国人講師対象にインタビューを行い、どのような経歴を持つ講師によってどのような考え方で英語教育が行われているのかについても明らかにする。

最後に、これらの調査結果を分析し、幼稚園で英語教育を行うことによって生まれる教育の可能性についても考えたい。

2. 幼稚園の英語教育に関する先行研究の検討

前述したように、小学校英語に関する先行研究や論文等が多い。反面、幼児（特に幼稚園）を対象とした先行研究は、小学校における英語教育関係の論文と比較するとそれほど多くはない。そのため、幼児期における英語教育の先行研究のテーマは大きく7つに分けることができる。それは以下の通りである。

- ①幼稚園における英語教育の実態調査
- ②英語関連の授業実践報告
- ③英語関連のカリキュラム調査
- ④保護者の英語教育に関する意識調査
- ⑤幼稚園における英語教育の効果
- ⑥幼児期における英語教育の是非
- ⑦英語活動の現状と問題点

である。それぞれについて一瞥しておこう。

まず、①英語教育の実態調査では、アンケート調査により特定の地域の幼稚園や保育園における英語教育の実態が明らかになっている。山内 (1999) は、自身が在職している短期大学の卒業生が勤務する幼稚園・保育所における英語教育の取り組みについてアンケート調査を行い、その回答結果を分析した。池中 (2006) もまた、石川県の67箇所の幼稚園でアンケート調査を実施し、英語の授業内容、頻度、指導者、指導形態について調査し分析した。田中ら (2007) は、文部科学省の研究開発校に選ばれた全国の公立幼稚園のうち10園の英語活動の取り組みをまとめている。

次に、②授業実践報告には、中山 (2003) と北條ら (2009)、米田ら (2002) などによる自身が幼稚園や保育園で行った英語教育の内容をま

とめたものがある。中山 (2003) は、自身が幼稚園で行っている英語の時間の授業についてまとめ、カリキュラムのあり方や早期英語教育について論じている。また、北條ら (2009) は、自らがコーディネーターとなり講師を派遣し、幼稚園と小学校で行っている英語教育の学習プログラムについてまとめた。この研究では、授業2回分の幼稚園の英語活動プログラム紹介されている。

米田ら (2002) もまた、自分たちが幼稚園で行っている英語活動についてその概要を報告している。米田らはさらに、英語教育を受けている在園児を対象に英単語の聞き取りテストも行い、在園児の英単語の聞き取り能力と、自らが外国人講師と共に行っている英語教育が園児の英単語の聞き取り能力にもたらす効果の調査も行っている。また、米田らは、幼稚園教諭と在園児の保護者に英語活動に関するアンケートもとり、自分たちが行う英語教育が子どもに与える影響を調査した。このアンケートでは在園児の保護者の幼稚園における英語教育に対する考え方についても調査された。

③カリキュラム調査では、中山ら (2009) がまとめた自分たちが行った幼稚園での英語の授業を基に作成したカリキュラムがある。

④意識調査では、前述の米田ら (2002) の調査以外に中山ら (2009) の調査がある。中山らによる調査は、幼稚園での英語教育の必要性から、授業で扱って欲しい内容、現在の学校での英語教育の問題点に至るまで、保護者の英語教育観について10項目にわたる。

⑤英語教育の効果については、米田ら (2002) は、幼稚園における英語教育の効果英単語の聞き取りテストによって調べた。寺尾ら (2010) は、英語活動によって子どもが学んだものを保護者と幼稚園教諭を対象にしたアンケート結果によって明らかにした。寺尾らはまた、英語活動を体験して幼稚園教諭の英語教育に対する考え方がどう変わったかについても調べた。また、横山 (1999) は、園児対象のインタビューテストと保護者へのアンケートの両方を使って幼稚園における英語教育の効果の検証を行った。香曾我ら (2004) は、自身が勤務する幼稚園での

外国人講師による「英語遊び」が園児たちにどのような影響を与えるのかを4人の園児の反応を1ヶ月間、5回の授業において観察を行った。

⑥英語教育の是非についての研究もいくつかある。平尾(2002)は、子どもの言葉の世界の観点から外国語は10歳以上から始めたほうが良いという結論を出している。鈴木(2009)は、脳科学の見地から英語教育が幼児期からなされるべきであると述べ、日本人の幼稚園教諭が「英語で保育」を行っている静岡県のある認可幼稚園の実践を紹介している。

最後に、⑦英語活動の現状と問題点については、佐藤(2005)が行った大阪府東大阪市にある幼稚園と保育所での英語教育の現状についてアンケートを使って調査し、その結果を基に早期英語教育に関する問題点について考察したものがあ

る。以上、これまでに行われた幼児期の英語教育における研究や調査についての概要を述べたが、今回のような複数の幼稚園における外国人講師による異なった形態の英語の授業を実際に観察してその内容をまとめるという調査はこれまでなされなかった。

また、外国人講師が行う授業実践報告は僅かであり、どのような外国人講師によって英語の授業が行われているのかについての調査はほとんど行われていない。したがって、6つの幼稚園で現在行われている5つの異なった形態の英語教育に関する調査及びこれを行う外国人講師のインタビューを含んだ本研究は、幼稚園での英語教育の実態を把握する上である程度重要な意味を持つと考えられる。

3. 研究の方法

2011年11月に、岐阜市内にある私立幼稚園の中から10園を任意に選び、授業見学と外国人講師へのインタビューを依頼する文書を郵送した。その結果、見学を許可して下さった6園で実際に授業を観察し、授業後に外国人講師へのインタビューを行った。

授業見学は、1つの園につき1日で、見学日

にその園で行われる英語の授業をすべて見せていただいた。授業の前に、幼稚園の園長先生もしくは主任の先生を対象に、園で行われている英語の授業についての概要等をお伺いし、授業終了後、外国人講師へ15分程度のインタビューを行った。日本人講師とのチームティーチング(TT)の場合は日本人講師にも同じインタビューを行った。

幼稚園教諭に伺った英語の授業の概要は以下の通りである。

- ①英語の授業/活動の呼び名
- ②カリキュラムに入れているかどうか
- ③英語講師の数
- ④英語講師の雇用形態
- ⑤英語講師の勤務日数と時間
- ⑥1つの授業を担当する英語講師の人数
- ⑦英語の授業の対象園児の年齢
- ⑧英語授業の1クラスの人数
- ⑨授業の頻度
- ⑩1授業の時間

外国人講師へのインタビュー内容は概ね以下の通りである。

- ①性別
- ②年齢
- ③国籍
- ④取得した学位
- ⑤英語を教えるための訓練経験の有無
(TESOL, TEFL含む)
- ⑥英語のネイティブスピーカーかどうか
- ⑦授業で行っていること
- ⑧授業内容は誰が決めているか
- ⑨年間のカリキュラムの有無
- ⑩授業で一番大事にしていること
- ⑪授業で苦勞していること
- ⑫現在の自分の授業に満足しているか。改善したい場合はどのように改善したいと考えているか

授業を見学しながら、授業で行われている内容、使用されている教材、外国人教師が子どもに話す内容、子どもの反応、外国人講師の役割(日本人講師含む)などについて記録した。

4. 調査結果 (A～F園)

今回訪問し、授業を見学させていただいた幼稚園の英語教育の概要と外国人講師の経歴、見学した授業の内容とその特徴について、訪問した順にまとめた。

4.1 A園

4.1.1 英語教育の概要と講師について

A園では、「ふれあいタイム」とよばれる英語の授業(活動)を全園児を対象にクラスごとに月に1回20分程度行っている。目的は英語習得ではなく、外国の文化や英語にふれることである。「ふれあいタイム」はカリキュラムの一部であり、授業は外国人講師1名と日本人講師1名のチームティーチング(TT)で行われている。講師は、語学学校からの派遣であり、現在の講師は2年前からこの園を担当している。外国人講師は20代男性のアメリカ人のネイティブで日本に来て3年目、日本人講師は、10年以上の英語講師経験を持つ40代女性である。両者とも、大学の専門は英語教育ではないが、自身が所属する語学学校で2～3週間の研修を受けている。また、両者ともに非常勤講師で日本人講師は月に2日、計10クラスで授業を行う。外国人講師は、これに加え、放課後の希望者による英会話教室を週に3日程度担当している。

また、A園では月に1回の英語の授業のほか月に1回「なかよしタイム」という活動にも英語活動を取り入れている。「なかよしタイム」は、どろんこ遊びやおりがみなど複数の遊びから園児が好きなものを選んで参加する時間である。この遊びの中に英語遊びがあり、「ふれあいタイム」とは違った派遣会社から講師を招き、様々な国籍の外国人講師3人と日本人講師1人がこれを担当している。この「なかよしタイム」の講師は、英語を母語とする国だけでなく、アフリカやネパール、インドネシアなど様々な国籍である。また、A園では、遠足や餅つきなどの園の行事にも外国人講師を積極的に招いている。

4.1.2 授業内容

A園では、年長児の授業を3つ、年中児の授業を4つ見学した。授業中、外国人講師は英語だけを話し、日本人講師は日本語と英語の両方を話す。日本人講師は、外国人講師の言うことで子どもが理解できないことを日本語に訳したり、子どもの質問に答えるときに日本語を使う。幼稚園教諭は子どもと一緒に床に三角すわりをして授業を受ける。

A園の授業内容は、派遣元の語学学校が作成したシラバスに則って行われている。学習内容は、単語の学習が中心で、文章は“How are you, I'm fine thank you, Can I look?”などの特定のフレーズに限られている。これらは、それぞれに決まった手振りがつけられていて子どもは全員これらを良く覚えている。

年長児の授業は、あいさつ、講師の名前の確認、1月から12月までの月の言い方、1日から31日までの日付の言い方の確認から始まり、スーパーで売っている“eggs”や“cheese”などの食品の言い方を学び、これらの語彙を“Farmer's in the dell”の替え歌に乗せて踊りながら歌った。

年中児は、月の言い方の練習、英語でのじゃんけん、体の部位と色、丸や四角などの形、顔のパーツ言い方の練習が行われた。

A園の特徴は、授業にストーリー性があり、子どもが英語を話したくなる設定作りがなされているということである。日本人講師が外国人講師の発言を日本語で説明をするため、授業は大変分かりやすく、子どもは終始とても楽しそうな様子で、大盛り上がりであった。講師たちも英語を楽しませることを第一目標に掲げているという。

年長児の授業では、外国人講師がお腹がすいたとつぶやく→日本人講師が教室を探し回るが食べ物がない→二人で相談した後、買い物に行こうと決める→スーパーに買い物に行くという風にストーリーが展開されていた。ストーリーの中で、外国人講師が買うもののメモを見せてくれないという演技をし、子どもが自ら“Can I see?”と聞きたくなる工夫がなされており、子どもは、メモの内容を知りたくて、外国人講

師が出すヒントを必死に聞いていた。

年中児の授業もストーリーが工夫されている。ダンボールと色画用紙でできたロボットセットのパーツを外国人講師にはめていく。パーツにそれぞれ色が付いていて、体にはめながら、“leg, arm, body”などの体の部位と“green, red, light blue”などの色の言い方を覚えていく。最後に、忘れてきた頭のパーツを作るために、子どもに特徴を聞きながら画用紙に顔を書いていく。子どもは目は丸、鼻は三角などと言いながら“circle, square, triangle”などの形の言い方と、“eyes, nose, mouth”といった顔のパーツの言い方を覚えていく。

ルーティーンワークになりがちな月や日の言い方なども、11月が見えたらストップと言う、途中で人気のコメディアン写真を入れておき全員で面白い動作をするなど、子どもが楽しめる工夫がなされている。

4.2 B園

4.2.1 英語教育の概要と講師について

B園では、園長先生がオーストラリア人(男性)であることから、「園長先生との英語の時間」とよばれる英語の授業(活動)を、年中児・年長児を対象にクラスごとに月に1回15~20分程度行っている。この時間は、カリキュラムに含まれており、シラバスは園長先生自身が作成している。また、登園時に園長先生が園児一人ひとりと英語であいさつを交わしている。

4.2.2 授業内容

B園では、年長児の授業を見学した。園長先生は、「子どもは大きくなってからでも色々なことを吸収できるが英語の発音は基礎がとても大事である」と考えており、自ら行う授業では、子どもたちが英語を正しく発音できるように、英語を発音するときの口の形、声の出し方を示し、子どもが正しい英語の発音を習得できるよう丁寧に指導している。

授業を行うのは園長先生一人で、授業の中で、英単語やフレーズは英語で話し、指示などは日本語で伝える。子どもと幼稚園教諭は横に2列に並べられた椅子に座り、園長先生は園児の前

に椅子に座って授業を行う。

授業では、1から10までの発音の仕方を先生が示し、口の形を確認しながら子どもに何回かリピートさせる。その後、“Good morning. How are you? I'm fine thank you.”の発音練習を行った。最初に園長先生がモデルを示し、次に、子どもを一人ずつ先生の元に呼び、向かい合って両手をつなぎ、目を合わせながら子どもといっしょに発音練習を行った。子どもは園長先生の口の形をしっかりと見て真剣に発音をしていた。子どもは、いつも接している園長先生との授業であるため安心して受けているようであった。

4.3 C園

4.3.1 英語教育の概要と講師について

C園は、満三歳児クラスから年長児クラスまですべてのクラスを日本人と外国人教員が2人で担任をしているという特徴を持つ。11人の外国人講師はすべて常勤で、保育中は英語だけを話す。英語の講師としてではなく幼稚園の「先生」として採用されている。常勤で担任も持つため、トイレの援助から給食の世話まで日本人の先生と全く同じ仕事をこなす。また、カリキュラムの中に「フォニックス(Phonics)」と「スピークアップ(Speak-up)」と呼ばれる英語の授業があり、その指導も行う。放課後は園児の約半数が受けている課外の英語教室の指導も行っている。

C園のこの保育プログラムは平成13年に岐阜県教育改革進行モデル授業として発足し、外国人スタッフのみ、また英語のみで保育を行う「インターナショナルスクール」とは違い、日本の幼稚園教育要領を基本に保育を行っている。C園は真の「国際人」を育成するためにこの保育プログラムを導入しており、教育の目的は英語を話せるようになることにはない。将来「国際人」として活躍できる人間を育てるためのバランスの取れた環境を作ることが目的としている。そのため、子どもに日本語を話すことを禁じておらず、園内では子どもはほぼ日本語で生活している。

C園の11人の外国人講師は、男性が6人、女

性が5人で、年齢は23才から39才である。国籍はアメリカ人が5人、カナダ人3人、スコットランド人2人、南アフリカ人1人で、全員が大卒で内1人が母国の小学校教員の免許を持っている。TESOLを持つ教員も2人いる。勤続年数は1年未満から4年である。

4.3.2 授業内容

英語の授業には、「フォニックス」と「スピークアップ」の2つがあり、どちらも週に1回10～30分程度それぞれの外国人の担任により指導される。フォニックスでは主に英語の発音やアルファベットを書く練習をスピークアップでは英語を話すためのフレーズの練習などを行う。

今回は年少児クラスの朝の会と「フォニックス」の授業を見学した。朝の会は、外国人講師主導で行われている。日本人の担任はピアノを担当する。朝の歌を日本語と英語で歌い、あいさつを日本語と英語で行う。その後、“Twinkle, twinkle, little star”などの英語の歌を4曲、「この指とまれ」などの日本語の曲を3曲振りつきで歌う。子どもは、英語、日本語にかかわらずどの歌も大きな声で楽しそうに歌っていた。その後、講師は子どもをグループごとのテーブルの周りに座らせ、英語で日付、曜日、天気子どもに質問しながら確認し、出席カードを配りシールを貼らせた。

朝の会の後、「フォニックス」の授業が30分程度行われた。教室の一角にあるカーペットに集まった子どもの前に外国人講師がホワイトボードを伴って椅子に座る。始めの歌を英語で歌った後、“Five little monkey”の歌を歌って数の言い方を簡単に確認した後、フォニックスの学習が始まった。講師がホワイトボードにアルファベットをAから順に書き、子どもにリズムをつけて発音をさせ、音がわかりにくいものについては、その音と同じ音のするものを紹介し理解させる。一通り終わったら、AからZまでのアルファベットとその音から始まる単語の一覧表を見せ、身振り手振りをつけてリピートさせる。その後、アルファベットを書く練習に移った。この日はPの書き方で、講師は、子どもと対話をしながら、書き始めと書き順のモデルを

示す。その後、子どもに指で手にPの文字を書かせ書き順を確認、何度か確認を繰り返した後、子どもにワークシートを渡し、席にもどって各自やらせた。ワークシートには大文字のPが3つ、小文字のPが3つとPで始まる単語であるかぼちゃの絵が書かれており、最初はクレヨンでなぞる、次に色を塗る、最後に自分で書くという練習になっている。

C園の特徴は、前述の通り、外国人講師と日本人の幼稚園教諭の2人で1つのクラスを指導していることにある。このシステムの一の特徴は、子どもの英語力の高さである。子どもは、幼稚園にいる間ずっと、外国人講師の話す英語を聞いて生活している。そのため、C園の園児の英語の聞き取り能力は非常に高い。C園の外国人講師で他の場所で放課後の英会話教室も担当している講師によると、C園の園児の聞き取り力は英語に毎日さらされていない園の園児と比べると、はるかに優れているということである。見学をした当日も、外国人講師が指示を出した際に、指示の内容が分からず右往左往したり、聞き返す子どもは一人もいなかった。フォニックスの授業中も、授業がすべて英語で行われるにもかかわらず、講師の言うことが分からなくて集中力を欠く子どもはおらず、30分以上もの間、講師の話や指示をしっかりと聞き、英語学習を日本人の先生が主導で行う他の活動と同じように楽しんで行うことができていた。

外国人講師のインタビューによると、英語の聞き取り能力は園児によって差があるという。園児が英語の指示だけで日常生活が出来るのは、外国人講師が話す英語そのものを理解しているとも考えられるが、自身が置かれている場面や状況、講師の声のトーン、講師の表情などを総合的に判断して理解しているのかも知れないとも語っていた。

C園のもう1つの特徴は、外国人講師が「英語の先生」ではなく、幼稚園の「先生」であるという点である。外国人講師たちは、単に英語を教える講師とは違い、幼稚園の「先生」として子どもとかかわっているように見受けられる。

実際に外国人講師に聞いてみると、C園に来た理由に、日本の中学や高校でALTをしてい

たが、英語を教えるためだけの先生としてお客様の扱われるのが本意であると感じた講師や、担任の先生になり、自分の生徒を持ちたかったという理由を挙げる方もいた。これらの回答からも分かるように、C園の外国人講師たちは「英語の先生」ではなく幼稚園の「先生」として子どもに接しており、子どもも外国人講師たちに「先生」として接していた。

4.4 D園

4.4.1 英語教育の概要と講師について

D園では、「英語あそび」とよばれる英語の授業（活動）を年中児・年長児を対象にクラスごとに月に1～2回30分程度行っている。「英語あそび」はカリキュラムの一部であり、外国の文化や英語にふれることを目的としている。授業は、日本の私立大学の教員であるカナダ人講師が担当している。講師は、英語教育が専門でTESOLの資格を持ち、大学で英語を教える傍ら、5年前から、週に1回、1日に4クラス、園児に英語を教えている。

4.4.2 授業内容

D園では、年長児の授業を2つ、年中児の授業を1つ見学した。授業の中では、外国人講師は英語だけを話し、授業も英語だけで行われる。授業は教室で行われ、子どもと幼稚園教諭は半円形に並べられた椅子に座って授業を受ける。

シラバスは外国人講師が作成し、授業には、講師自身が集めた子どもの英語学習に適したクオリティーの高い教材が使用されている。学習内容は、英単語だけでなく、まとまったフレーズや文章、フォニックスのような個々のアルファベットの音の練習なども含む。

年長児の授業は、あいさつの歌ではじまり、その後、講師が表情と身振り手振りなどで、“sad, cold, hungry, happy, good, great!”などと感情を演技し、子どもはそれを読み取り英語で答える。次に、“Clap your hands! Shake your hands slowly! Role your finger quickly!”などと講師が言う動作をして遊ぶ。次に、“yellow chair!, purple pen!”などの色と文房具の言い方のチャンツをCDをかけな

がら練習する。その後、数字の言い方の練習をする。講師が、数字が書いてあるカードを見せ、子どもが数字の言い方を答える。講師は子どもが言い終わったカードを床に並べ、今度は数字の色を“What color is No.6?” “What number is blue?”などとクイズ形式で質問をしながらカードを拾い上げる。次は、“Head, shoulders, knees and toes”の歌を踊りながら歌う。次に、母音の発音練習。表に“Ee”などのアルファベット、裏に“elephant”などの表に書かれている母音の発音から始まる単語が書かれたカードを、表→裏の順番に見せ、母音単体と単語の発音を練習させる。

次は名詞の単数形と複数形の練習チャンツ。“pencils and a pen”というフレーズを繰り返すチャンツをCDに乗せて歌った。続いて、家に帰ってからする10つの事が歌詞になっている歌“I come home.”を歌った。歌詞は“I do my homework. I walk the dog. I watch TV. I take a bath.”など子どもには難しいので、絵の描いてある10枚のカードを見せながら歌わせた。次は、カードを使って動物の言い方の練習。講師がいろいろな動物のカードを見せ、子どもが英語で答えていく。時々、カードを反対に見せると、子どもは大きな声で“Upside down!”と講師に教えた。次は、食べ物の歌。講師が食べ物が書かれた数枚のカードを見せ、子どもは食べ物の名前を答える。その後、食べ物が歌詞になった歌を歌った。次に絵本を使ったクイズ。“Where's the spot?”というドアや箱を開くと中に動物が隠れているという仕掛け絵本を使い、講師が“Who is in the box?”などといくつか質問をし、子どもは隠れている動物を答える。最後に“Five little monkeys”を使って数の練習を行った。

年中児の授業では、年長児クラスと同じことも行うが、年長児クラスに比べて体を動かす活動が多かった。見学した授業では、あいさつ、カードを使っての形容詞の学習と色の言い方の学習の後、年長児と同じチャンツを2種類行い、その後、歌いながら踊る歌が4曲取り入れられていた。ひとつは“Where's a teapot?”で講師が歌詞を説明した後、子どもも立ち上がって

踊りながら歌う。次に手をゆっくりたたいたり、早くたたいたりする歌、体を動かす歌、最後に“The wheels on the bus”の歌を歌った。

D園のこの授業の一番の特徴は、子どもが自然に英語を話すように授業がデザインされていることである。講師は子どもにほとんど質問をしない。講師がある動作をしたり、自分の表情を変えてみたり、カードなどを提示したりするのを見て、子どもが自然と求められている英語を自ら話し始める。講師が、子どもがアクティブにコミュニケーションを行う授業を目指しているという言葉通り、子どもがコミュニケーションを取りたくなる様な授業作りが行われている。

外国人講師1人による英語だけの授業であるが、子どもと講師の間に意思の疎通の困難はなく、とても楽しそうに授業を受けている。日本人講師と外国人講師2人のチームティーチングのような盛り上がり方とは異なるが、特に体を動かしたり歌を歌ったりする場面では、皆とても活発に参加していた。また、外国人講師が英語だけしか話さないため、子どもが英語を聞いたり話したりする英語に触れている時間がとても長い。また、英語だけで授業が進んでいくため、子どもは講師の話に集中して耳を傾けていた。

この園では、放課後の英会話教室は行っていないが、英語教育に関する専門性の高いこの講師の授業を定期的を受ければ、英語ということばに触れるだけでなく、かなりの英語力が付くように感じられるような授業であった。

4.5 E園

4.5.1 英語教育の概要と講師について

E園では、「英語あそび」とよばれる英語の授業(活動)を年長児と年中児を対象にクラスごとに月に2回20分程度行っている。目的は英語習得ではなく、英語あそびを楽しむことである。「英語あそび」はカリキュラムの一部であり、授業は外国人講師1名と日本人講師1名のチームティーチング(TT)で行われている。講師は、A園の講師と同じ語学学校からの派遣であり、現在の講師は本年度からこの園を担当している。外国人講師はアメリカ人男性で大学

での専門は英語教育ではなく、自身が所属する語学学校で2～3週間の研修を受けている。日本人講師は、女性で大学の英文科卒である。二人とも非常勤で日本人講師は月に2～4日の勤務で合計4クラスの授業を行う。外国人講師は、これに加え、放課後の希望者による英会話教室も担当している。

4.5.2 授業内容

E園では、年中児の授業を2つ見学した。E園のシラバスや授業内容、授業の進め方等は、講師がA園と同じ語学学校からの派遣であるため、ほぼA園と同じである。

この日見学した授業は、前回A園で見た授業の続きであった。授業の内容は、あいさつから始まり、講師の名前の確認、天気を確認した後、前回の復習として同じロボットセットを使い、色の言い方、体の部位の復習を行った。次に、ロボットに変身した外国人講師をリモコンで動かすという設定で、“right arm up, left leg down”といった言い方を学習させ、これらの言い方が歌詞になった歌“Let's do the Pinokio”を踊りながら歌った。

授業は、A園と同じくストーリーが良く出来ており、前回の授業と連続性があるため、子どもは授業が始まるとすぐに前回の内容を思い出して英語活動を楽しんでいた。本当にロボットになってしまった外国人講師を日本人講師がリモコンで動かす場面では、子どもから「やってみよう！」という声もあがり、楽しんでいる様子が伺えた。特に“Let's do the Pinokio”の歌では子どもは大盛り上がりで、大きな声で歌いながら、体を大きく動かし全身で歌を楽しんでいた。

4.6 F園

4.6.1 英語教育の概要と講師について

F園は、C園の姉妹園で、異文化を持った外国人と触れ合える環境を作るという目的で、1人の外国人講師を常勤として採用している。C園のように、外国人講師はクラス担任ではないものの、幼稚園教諭と同様に、一日中子どもといっしょに過ごす。講師は本年度からの勤務を

始めたイギリス系イタリア人男性で英語のネイティブである。彼は、大学卒で英語教育は専門ではないが、来日後、姉妹園のC園で研修を受けている。英語の授業としては、「英語の時間」とよばれる英語の授業（活動）をカリキュラムの一部として全園児を対象にクラスごとに週に1回30分程度行っている。また、放課後には希望者による英会話教室も行っている。

4.6.2 授業内容

F園では、年長児の授業を2つ見学した。授業は外国人講師が一人で行い、幼稚園教諭は子どもと一しょに授業を受ける。授業は教室やホールで行われ、子どもはカーペットに三角座りをして授業を受ける。

F園の授業内容は、幼稚園が作成したシラバスに則って、講師が具体的な授業内容を考えている。学習内容は、単語の学習や“I like～.”など簡単な英文も扱っている。

授業は、講師と子どもとの対話で進んでいく。今回の授業は単語が書かれたカードを使って行われた。講師が、天気の確認、暑いか寒いか、今日の気分を次々に質問し、その答えを“sunny, rainy, snowy”などの答えとなる単語と絵が書かれたカードを見せながら確認する。次に、“Who likes ～?”と質問し、“swimming, dancing, reading, running”などの動作を表す単語を学習させた。その後、動物と昆虫の絵と食べ物の絵の描かれたカードを見せ、動物、昆虫、食べ物の言い方を確認した後、ゲームを行った。ゲームは、裏向けに並べられた昆虫と食べ物のカードを子ども全員に順番に1枚ずつ取らせ、カードに書かれているものが好きか、嫌いかを“I like ～. I don't like ～.”のいずれかで表現させるというものである。子どもは、友達が引くカードに興味津々で、ゲームをととても楽しんでいった。

F園の授業の特徴は、講師と子どもとのコミュニケーションが多いことである。子どもにとって外国人講師は「英語の先生」ではなくいつも一しょにいる幼稚園教諭なので、講師の質問に対して、普段講師と話しているように口々に答える。講師は子どもに「話させること」を目

標に掲げており、その目標どおり、まるで講師と子ども1人1人が話をするように授業が進んでいた。また、F園の授業では、子どもを型にはめない。講師がこう言えば、子どもはこう答えるというような決まり文句を覚えさせたり、全員であるフレーズを意図的にリピートさせて覚えさせることはない。イタリア人である講師は、イタリアと比べて日本の教育現場にはプレッシャーが多すぎると感じており、自身の授業では、子どもが普段どおりでいられるように、友達のように子どもに接してもらえよう心がけている。

＜ある園での英語の授業の様子＞



5. 考察とまとめ

5.1 考察

今回、本研究のために岐阜市内にある6つの私立幼稚園にご協力をいただき、授業の見学と外国人講師の方々にインタビューをさせていただいた。実際に授業を見学し、外国人講師の方々にインタビューを行ったことで、現在幼稚園で行われている英語教育の特徴が明らかになった。本項では、見学をした6園の英語教育の特徴とその可能性について考察したい。

今回授業を見せていただいた6園の英語教育の形態の特徴をまとめると、外国人講師と日本人講師の2人でチームティーチング（TT）を行っている園が2園（A園、E園）、外国人講師1人で英語の授業を行っている園が1園（D園）、園長が外国人で自ら英語の授業を行っている園が1園（B園）、複数の外国人講師を常勤で雇用し、幼稚園教諭と2人でクラス担任を行い、クラス担任の外国人講師が英語の授業を

行っている園が1園 (C園), その姉妹園で1人の外国人講師を常勤させ, その講師が英語の授業を行っている園が1園 (F園) であった。

外国人講師と日本人講師でTTを行っている2園 (A園, E園) は同じ語学学校から講師を招いており, 講師たちの話によると, この語学学校は岐阜市内の他の多くの園も担当しているとのことなので, この形態で英語教育を行っている園は多いと考えられる。

英語教育を担当している講師は, 国籍はアメリカ, カナダ, イギリス, オーストラリア, ニュージーランド, 南アフリカなどで, 20代から40代の男女で, 全員が大卒以上であるが, TESOLの資格を持っている英語教育の専門性の高い講師は3人と少数であった。勤務形態は, 英語の授業のみを担当する場合は非常勤, 担任をもつC園とその姉妹園F園のみ常勤であった。

英語教育の目的についての特徴は, どの園でも英語の授業を行う目的が英語という言語の習得だけではないという点である。「ふれあいタイム」や「英語あそび」「英語の時間」などといった英語の授業の名前から分かるように, 英語の授業は, 英語の勉強ではない。外部講師が授業を行っている園では, 英語を取り入れている目的は, いずれも, 英語という異なった言語に触れることや英語を通して異なった文化に触れることである。授業では, 英語の読み書きは取り扱わず, 遊びとして英語や外国人講師に触れ, 英語を話すことを楽しむことが重視されている。外国人講師たちもこれを心得ていて, 子どもが楽しめる授業を行うために努力している。

外国人講師と幼稚園教諭が2人でクラスを担当する, 英語教育では先進的な試みを行っているC園においても, 文字を書くことも含んだ「フォニックス」や「スピークアップ」といった他園にくらべて高いレベルの英語の授業を行っているものの, 英語を習得することは第一目標ではない。将来, 真の国際人になりうる子どもを育てるための1つの環境として英語教育を取り入れている。

授業内容の特徴は, 英語を楽しむこと, 英語で楽しむことが重要視されていることである。

幼児は, 中学生や高校生のように教科として英語を学ぶわけでないので, 英語学習への強い動機がない。また, 幼児は中高生に比べて集中力が続かない。そのため, 幼稚園の英語の授業では, A園とE園のTTのように授業にストーリー性を持たせ, 子どもの英語を話したい気持ちを掻き立てたり, C園やD園, F園などでも, 子どもの身近なもの, 子どもが好きなものを教材としたり, 歌やダンス, ゲームなどを積極的に取り入れ, 子どもが英語を楽しめる授業作りの工夫がなされていた。

なかでも, 英語の授業を楽しめるものにするため, 効果的に使われていたのが「全身反応法 (Total Physical Response Method /TPR)」という英語教授法である。TPRは, 「子どもが母語を獲得する際には, 聞く能力が話す能力に先行することを重視し, 外国語教育においても聞いて理解することを最優先する」外国語教授法で, 特に入門期に有効とされている (村野井ら2001)。具体的な指導法としては, 教師が目標言語 (英語) である動作をするように指示し, 学習者はその動作を全身を使って行い, 反応するというものである。例えば, D園では, 講師が “Clap your hands! Shake your hands slowly!” などと指示を出し, 子どもがその動作をする活動が取り入れられていた。他にも “Head, shoulders, knees and toes” などの英語の歌詞どおり体を動かす歌が多く含まれていた。E園でも “Let's do the Pinokio” という歌詞の指示通りに体を動かすあそびが取り入れられていた。外国人講師が担任をするC園では, 「ごみを拾いなさい」や「園庭に移動しなさい」, 「給食の準備に取り掛かりなさい」「～を取って」などといった外国人講師によるすべての指示が英語でなされるため, 子どもは一日中TPRでの指導を受けていることになる。

5.2 幼稚園における英語教育の可能性

今回調査を行った6園では5つの異なった英語教育を取り入れていたが, 幼稚園における英語教育の教育的な可能性について考えてみたい。

先に, 幼稚園の英語の授業には, TPRが効果的に取り入れられていたと述べたが, 子ども

は、TPRによる英語活動を生き生きとした表情で全身でとても楽しんでた。子どもが楽しむ様子は言葉では言い表せないほどである。このようにTPRによる英語活動を全身で楽しむことが出来るのは幼児期の特徴であると考えられる。同じTPRの活動を小学校高学年で行っても、恐らくしらけた雰囲気になり、同じ反応を得ることは難しいであろう。TPRを用いた指導法による英語を全身で楽しむことができるのは幼児期の子どもだけであり、そういった意味では幼児期は英語を楽しむ絶好のチャンスであるといえるかもしれない。また、中学校から始まる英語教育では、幼稚園の英語の授業で多用されているマザーグースにでてくる童謡や遊び歌などは扱わないため、こういった文化に触れることが出来るのも幼児の英語あそびの特長であろう。

今回の授業見学ではほぼ全員の幼児たちが英語遊びを全身で楽しんでた。この幼児期特有の英語を全身で楽しんだという経験は、小学校から始まる英語学習にプラスの効果をもたらすかもしれない。横山(1998)は、幼稚園の年長児を対象とした調査で英語の学習が、英語に対する好感度を高めることを明らかにしているが、幼稚園で英語を楽しむという経験をした子どもは、英語に対するプラスのイメージを持ち、小学校で英語学習を始める際に英語学習に対する抵抗感が少なくなるかもしれないと感じた。

今回調査した園の中に、外国人講師と日本人の幼稚園教諭が2人でクラスを担当するという先進的な英語教育を行っているC園があった。外国人講師により英語のみで教育を行うインターナショナルスクールの存在は比較的良く知られているが、C園のような形態の幼稚園は一般的ではない。C園を見学し、このような環境の幼稚園で学ぶ子どもには、英語力だけでなくそれ以外の力も自然に育まれているのではないかと感じた。子どもが幼稚園での生活を通じて学ぶ取るものは、子どもそれぞれによって異なる。何を学んだかは目に見えるものばかりではない。だが、C園の園児たちは高いコミュニケーション能力が身につくのではないかと感じた。担任の1人が外国人講師であるため、子どもは、日

常生活において彼らが言うことを理解する必要がある。そのため、子どもは、外国人講師の発する言葉だけではなく、表情や声のトーン、その場の状況といった、言葉を理解することだけで事足りる日本語でのコミュニケーションではあまり必要がなかった様々なコミュニケーション能力を自然と身に付けることになる。

また、横山(1998)は幼児は幼稚園で英語を学ぶことによってコミュニケーションが積極的になり、それによって仲間との交流も盛んにするのではないかと述べているが、外国人講師とのやり取りの中で身に付けたコミュニケーション能力は、子どもどうしのコミュニケーションも増やし、さらには知らない人とコミュニケーションをとる力も育むのではないだろうか。若者のコミュニケーション力の低下が問題となり、KY(空気が読めない)という流行語が生まれる現代において、こういったコミュニケーション力はC園が目指す真の国際人を育てるためには不可欠な力であると思われる。

また、C園では、外国人講師は「英語の先生」ではなく、幼稚園教諭である。日本では殆どの子どもたちは「英語の先生」以外の外国人と接する機会がないが、C園のように「英語の先生」ではない外国人と毎日の生活をともにすることで子どもが学べることもまたとても多いと考えられる。

最後に、このような考察とまとめから、幼児期における英語教育は、①英語そのものを教え、英語力を身に付けさせることに重点をおく方向性、②外国人とのコミュニケーションそのものと外国の文化とのふれ合いを楽しむ方向性、および、③幼児教育の多様性を保つためのカリキュラムとしての方向性があるように考察できる。

当然のことながら、本論文は、この三つの方向性の是非や効果を論じるものではない。それでも、どの方向性においても、領域「言葉」との関係性が見受けられることは指摘しておきたい。

もとより、研究対象が私立の幼稚園であったため、英語教育の内容も多岐に渡り多様なものであったが、本来、幼児教育そのものが多様である。それでも、子ども達が豊かな言葉を理解

するための一助として、英語教育がひとつの役割を果たしていることが理解できた。

今後、幼児期における英語教育の実際と課題を研究するとともに、以上のような観点から領域「言葉」との関係で幼児期の英語教育を再度見直すような研究に着手したい。

〈謝辞〉

本研究を進めるうえで、岐阜市内の6つの幼稚園の先生方、外国人講師の方々、日本人講師の方々には大変お世話になりました。先生方のご協力がなければこのような調査を行い、報告をまとめることができませんでした。ここに記し、厚く御礼申し上げます。

〈引用文献〉

- ・平尾美智子, 2002, 「英語教育は小学生や幼児にとって必要か」, 日本保育学会大会発表論文集 55, 80-81頁。
- ・北條礼子・大田亜紀, 2009, 「幼稚園児・小学生の知的好奇心を刺激する英語教育の学習プログラムの構築」, 上越教育大学教育実践研究19, 19-26頁。
- ・池中雅美, 2006, 「石川県内の幼稚園における英語活動の現状と英語活動の位置づけに関する一考察—石川県の幼稚園へのアンケート分析をもとに」, 北陸学院短期大学紀要 38, 257-266頁。
- ・香曾我部琢・山田常夫, 2004, 「子どもの英語あそびの活動における異文化理解」日本保育学会大会発表論文集 57, 942-943頁。
- ・村野井仁・千葉元信・畑中孝, 2001, 『実践的英語科教育法』, 成美堂, 73頁。
- ・中山千章, 2003, 「幼児教育における英語」, つくば国際短期大学紀要31, 39-51頁。
- ・中山千章・廣瀬久子, 2009, 「付属幼稚園の英語指導における保護者の意識調査と考察」, つくば国際短期大学紀要37, 63-80。
- ・中山千章・廣瀬久子, 2010, 「幼児教育としての英語をめぐる環境とその指導のあり方について—付属幼稚園の英語カリキュラムをとおして—」, つくば国際短期大学紀要38, 43-58頁。
- ・佐藤香苗, 2005, 「子どもたちに楽しい経験を?—日本における英語活動の現状と問題—」, 東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要 2, 59-68頁。
- ・鈴木克義, 2009, 「英語は小学校からでは遅すぎます!~日本人教員が「英語で保育」する認可幼稚園の挑戦~」, 常葉学園短期大学紀要 40, 295-302頁。
- ・田中恭子・古茂田貴子, 2007, 「幼児期の英語教育について—保育活動としての英語—」, 大阪城南女子短期大学研究紀要 41, A15-A25頁。
- ・寺尾裕子・鈴木正敏・那須川知子・高橋美由紀, 2010, 「幼稚園での英語活動の試みによる園児の学びと教員の学び—保護者と教員への調査に基づいて—」, 学校教育学研究22, 1-12頁。
- ・山内圭, 1999, 「幼稚園・保育園での英語教育の取り組みについて(1)」, 新見公立短期大学紀要 20, 183-198頁。
- ・横山東, 1999, 「幼稚園における英語教育の効果についての研究」, 九州女子大学紀要35-3, 1-18頁。
- ・米田佐紀子・前垣内紀三子, 2002, 「幼稚園における英語活動の実践的研究」, 北陸学院短期大学紀要34, 135-151頁。